

### 中国の高校生「羽城館」訪問

## 人は親切、風景はきれい



同窓会館展示資料室にて

「日中二十一世紀交流事業」で中国から来日している高校生のうち、秋田を訪問した一行が十一月十六日（金）同窓会館「羽城館」を見学した。

政府が実施する「二十一世紀東アジア青少年大交流計画」の一環である「日中二十一世紀交流事業」の第六陣として来日した高校生三百五十名。十一月十三日（金）に日本に着き、三グループに別れ

て日本各地を訪問しているのだが、秋田県を訪れたのはそのうちの重慶、遼寧省出身者で引率者を含む二十三名。その中の十六名（男子二、女子十四）の高校生が秋田高校を訪ねた。引率の先生一名と通訳一名も同行していた。

前日十一月十五日（木）、高校生たちは秋田高校の歓迎会に望んだ。秋高生の吹奏楽や武道演舞等の他に訪日団生徒の出し物等もあったイベントの後、授業参観や放送委員会取材、部活動等の見学など

をして交流を深めた高校生たちは、すっかり打ち解けた様子で、十六日午前八時三十分羽城館に入った。

羽城館では柴田義弘校長（昭四十一卒）の写真展「彩時季」が開催されており、写真に映し出された秋田の四季折々の風景を興味深そうに鑑賞していた。

一行の一人、一年生の女子高校生に話を伺った。「日本でもっとも印象深かったのは人と風景。風景が大変きれいで、人もとても親切なのが心に残った・・・中国にも同窓会はあり、先輩たちはいろんな催し物をし

てくれる・・・今一番興味のあるのは日本語。またホームステイ先の家族の人たちともっと一緒にいたい。別れたくない。頑張つて勉強して中国の文化を紹介したり、交流をしていきたい。」

若い感受性で若者たちが草の根の交流をすることは相互理解のための第一歩だと感じさせられた言葉だった。羽城館を見学した高校生たちは教職員や、秋田高校に留学中の唐さん、ホームステイ受け入れ先の生徒たちの見送りを受け、名残惜しそうにバスで次の予定地に向かった。

## 「ステイ先」もつと居たい



部長 柳原弘幸

### 囲碁部

#### 全国高校囲碁選手権大会

笑うだろう。部員は三名、部活も週一回できるかどうか、残念ながら活動的とは言えず秋の新人大会ではそれを証明するかの様に成績は振るわなかった。

しかし、部活単位での活動ができないからといって全く活動していないわけではない。部員一人一人が個人で棋譜並べや定石研究、ネット碁・碁会所にて対局を行うなどで棋力の向上に

## 全国の壁は厚かった 部員三人で県大会制覇

をやるなど

破はおろか一勝すら許さなかった。この大会で強く感じたことは自分達の技量は県内では通用しても全国では太刀打ちできないということだった。これを踏まえ、来年度の目

標は県団体優勝・全国での一勝である。この目標は現在の部活の状況を知る人が聞けば

努めている。但しどんな競技でも当然努力しているのは自分だけでは

く相手も同じであり、また勝敗は運に左右されることもしばしばあり成果を収めるには困難が予想される。それでも自分たちの努力の成果を信じ取って前記の目標を掲げるのである。さらに自分たちの代で部員数が0になるという悲劇を生み出さない様、新人部員の確保をある意味何よりも優先すべき課題として、早急に解決へ導きたい。

最後にになりましたが、同窓会諸氏の今までのご支援に感謝すると同時に、これからどうなるかわからない囲碁部ですが、以後も変わらぬご支援をよろしく願います。

囲碁部の近況は昨年度の三年二名・一年二名計四名と部員数が少ない中で引退・引継ぎが行われ、本年度初めは部員二名のみとなり部活としての活動も困難を極めた。また夏の全県大会団体戦への出場も危ぶまれていたが、二年生一名が新たに加入し、ぎりぎりながら無事に出場。団体は秋田・大館鳳鳴・男鹿工業の計三校で争い、決勝戦大館鳳鳴に二―一で勝利し、優勝することが出来た。そして東京都千代田区日本棋院本院にて行われた全国大会へ出場した。しかし全国の壁は高く、秋高勢には予選突